

後、秀吉ノ守所ニ抵ル、鶉遠ク這テ、犬ヲ入テモナシ、信長怒テ、汝猿何ヲカ守レルヤ、立ナガラ睡リタルカ、吾聞ク、眞蔣ヲ以テ、皮膚ヲ摩スレバ、大ニ腫ト、命ジテ摩セシム、衣ヲ脱ギ裸ニナシテ摩スルニ、皮膚細截シテ血流ル、家ニ歸テ後チ、身熱シ腫疼コト甚シ、秀吉、其夜更番ニ當レリ、城ニ往テ宿ス、怨言慍色ナシ、明日信長見テ、笑テ召之、秀吉目モ腫レ塞ガリテ、見ルコト能ハズ、足モ腫レ滿テ、歩コト不堪、楹ニ觸レテ仆ル、起テ匍匐シテ前ム、皆誹テ曰、何ゾ自ラ愧ルゴトヲ知ラザランヤ、或曰、大志アル者ハ、小辱ヲ憂ヘズ、是レ韓信ガ胯下ノ俛出ニ同ジ、吾人必ラズ彼ガ下風ニ附カザル者ハアラジト、果シテ其言ノ如シ、

〔近代正說碎玉話 六〕安藤帶刀忠義篤厚之事

源君○徳川家康 同ク召使ハレタル人、皆一萬石ヲ賜リタル中ニ、安藤帶刀直次ノミ、横須賀五千石ヲ

賜リス、○中略 十年餘ヲ過テ、成瀬安藤等御前ニ伺候スル次デニ、汝等面々一萬石ノ領知ヲ與ヘヌ、仕置キ法度、イカハスルゾト御尋アリ、成瀬、臣等皆一萬石ナリ、安藤ハタゞ五千石也ト白ス、源君驚カセ給ヒテ、○中略 五千石十餘年ノ米穀ヲ積デ、一度ニ下シ賜リス、

〔藩翰譜二長澤〕或時、若君○徳川家光 大殿の御寢殿の屋の軒に、雀の巢をくひ、子を生みたりしを、こなた

より御覽じて、愆しがらせ玉ひ、長四郎とりて參らせよとあり、長四郎○松平信綱 年十一歳のときな

れば、いかにも叶ふまじきよし辭しければ、晝は驚ろきて、飛去る事もありなん、巢くひし所よく見置て、日暮てこなたの屋の軒の端さして登り、かしこに玄のび行て取べし、おとなは身おもく足音もしなん、たゞ汝取てまゐらせよと、候ふ人々の教へしかば、力なく、日暮てあなたの屋よりして、つたひく、ゆく、既に御寢殿の軒に至りて、取らんとせしに、踏損じ、御つぼの内へどうとおつ、將軍家○徳川秀忠 御刀取て、障子引あげ玉へば、御臺所燈火とつて、出させ玉ひ、御覽するに、長四郎にて在けり、將軍家不思議に思召て、汝は何しに爰には來りぬるぞと、御尋ありしに、今日の晝、此